

# 薬師寺の僧侶 旧大川小を語り継ぐ

奈良・薬師寺の僧侶、大谷徹装(てつじょう)さん(57)が東日本大震災以来、慰霊法要を続けている。児童74人、教職員10人が津波で犠牲になった旧大川小学校(宮城県石巻市)で毎年3月11日、お経をあげてきた。コロナ禍の今年、3月にはそれがかなわず、秋のお彼岸に訪れ、法要を営んだ。



追悼法要を終えて校舎を離れる前に1人で手を合わせる大谷徹装さん(宮城県石巻市)

## 毎年通い続け「恐ろしさ次世代に」



大谷徹装さん

大谷さんや信者ら約15人は、旧大川小を遺族2人に案内してもらった。遺族と面会したのは今回が初めてだ。津波がきたとみられる午後3時37分をさしたままの時計が2階の教室の壁にかかっていた。天井には、高さ8・6メートルまで覆った津波の跡が残っていた。子どもたち34人の遺体が重なるように山の斜面で見つかったと遺族が説明した。

「その場所が一番よく見える教室はどこですか」大谷さんが尋ねると、遺族は2階にある5年生の教室を案内した。窓ガラスも窓枠も津波で消えたまま。その向こうに、山の斜面が見わたせた。大谷さんは、用意してきた花をロッカーに置き、白いタオルを床に敷いた。そこに座り込み、般若心経や南無阿弥陀仏を唱えた。30分以上続いた。「子どもたちは冷たかったろうな、悔しかったろうな、その苦しみが和らぎますように、その一心でお経を唱えました」と語り、こう続けた。「なくなつた命をむだにしないため、同じ悲しみを繰り返さないため、地震の恐ろしさ、津波の怖さを次の世代に語り継いでいく。それが僧侶としての使命です」

### 本当の供養は

追悼法要を続けるのは、2人の「父」の影響が大きい。実の父は東京大空襲で家族を失った戦災孤児だ。「人間は本当に苦しいことは言葉にしない」と大谷さんが言うように、父は戦争のことを語らなかつた。もう1人は師僧の故・高田好胤(こういん)さんだ。戦時中に兵隊にとられ、戦後は薬師寺の住職として伽藍を復興させた。サイパンやグアムなどを巡って戦没者の慰霊を続けた。大谷さんは、硫黄島の慰霊で語つた好胤さんの言葉が忘れられない。

「戦争で死んでいった人たちは、自分が唱えるお経で成仏するような亡くなる方はしていない。本当の供養は、残された者たちが、なくなつた命をむだにしない、二度と過ちを繰り返さない生き方をすることだ」

### 遺族「励みに」

案内した遺族の佐藤和隆さん(53)は6年生だった三男の雄樹君を失つた。いま、仕事が休みの日には旧大川小を訪れる人たちに思いを伝える。「いろいろなお坊さんがお経をあげにきたが、繰り返し返さないために語り継ぐと言ってくれたのは初めて。自分たちの活動が間違っていないと確信でき、励みになった」と話す。

### 被災者と交流

2人の教えのもと、阪神大震災や新潟県中越地震、熊本地震など災害が起きるたびに現地に入った。東日本大震災の1カ月後に石巻

市を訪ね、震災半年後に初めて旧大川小で読経した。翌年から3月10日に東京の実家の寺で東京大空襲の慰霊法要をして、11日に旧大川小を訪れるようになった。グラウンドに座りこんでお経をあげてきた。石巻市や塩釜市で復興に取り組む被災者との交流も広まった。今回初めて旧大川小の遺族と出会え、校舎のなかからお経を唱えられたのも、その被災者の紹介があったからだ。

「ここに来るたび、人生は思いもかけないことの連続だと実感する。大切なのは、次につながる生き方、次のための生き方を考えることだ。次に災害が起きても、一人でも多くの命が救われたら幸せだと思う。生きてくれるだけでありがとう、生きて会えただけでよかったと声をかけてあげたい」

大谷さんは12月に仙台市で法話をする予定だ。遺族の佐藤さんは「旧大川小のほかの遺族も誘って、聞きに行きたいです。来年3月も遺族に法話をしてもらえれば機会を設けたい」と話している。(岡田匠)